

アプローチ期における規範意識育成の実践報告

二階堂 年恵・合原 晶子

国立教育政策研究所は、接続期カリキュラムを、アプローチカリキュラム（5歳児9月頃～3月まで）と、スタートカリキュラム（小学校入学～1年生の1学期終わりまで）とに分類している。アプローチ期の幼児たちは、自己主張をすることは出来ても、自己抑制に欠け、自分の気持ちを調整する力がまだ育っていない。友達との折り合いを付ける体験を重ねていく度に、自分はどうしたらよいのかという機会を持つことで、気持ちを調整しながら活動を進めていく時期である。遊びを通して、順番を守る、譲りあう、交代するなどのルールを守れるようになる場面を設定し、ルールを守らなかったために起きたトラブルに対しては、出来るだけ子どもたち同士で解決出来るように促し、場合によって教師が仲立ちし、どうすれば良いか、子どもたちで考える機会を持たせることが必要である。

このような5歳児における発達段階を考慮して構想した「かるた遊び」を実際の幼稚園において、実践することが出来た。実際の場面では、幼児主体の実践を行うため、幼児たちに自分たち自身で役割を決めさせたり、トラブルになった時に教師は、幼児たちに自分たち自身で解決できるような支援を行った。振り返りの際、幼児が遊びの中で生じたトラブルについて、子どもたちから困った事や嫌な気持ちになったことを発表させ、それらについて子どもたちと一緒に考えて、かるたは、「かるたを読んでいる人の手元を見ない」等のルールを決めていくことが出来た。

今回のかるた遊びを通して、子どもたちが葛藤体験を経験し、教師による適切な支援により、ルールの必要性に気付かせることが出来、子どもたちが自分の気持ちを自身で調整しようとすることによって、規範意識の芽生えを育み、5歳児段階の規範意識の醸成といった役割の成果は果たせたのではないかと考える。今後は、小学校段階への連携を視野に入れながら指導計画を開発し、実践していきたい。

キーワード：幼児教育、規範意識、人間関係、アプローチ期

1. はじめに

幼児期の教育は、その後の学校教育全体の生活や学習の基礎を培う役割を担っている。この基礎を培うということは、小学校以降の子どもの発達を見通した上で、幼児期に育てるべきことを幼児期にふさわしい生活を通して、しっか

り育成することである。幼児の発達や学びの連続性を保障するためには、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を図ることが重要である。

そこで、アプローチ期（5歳児後期）から、スタート期（1年生前期）の期間を接続期として捉え、接続期の指導のあり方について見直さ



なければならない視点が必要になってくるだろう。

現在、幼稚園、保育園において、教育課程・保育課程は編成されているが、アプローチ期、何を重視して、小学校への就学につなげていくのか、明確になっていないという問題点が挙げられる。

幼稚園教育要領解説の第2章「ねらい及び内容」の人間関係の「内容の取扱い」の(5)では、「集団の生活を通して、幼児が人との関わりを深め、規範意識の芽生えが培われることを考慮し、幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気付き、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること」¹と示されている。

現在幼稚園においては、幼稚園教育要領に基づいて子どもたちの発達段階に応じて、きまりに関する教育が行われているが、今後は規範意識の育成をより具体的で実践的な学びで幼稚園段階でも取り入れていく必要があるだろう。

幼稚園教育要領解説によれば、「規範意識の芽生え」とは、「友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる」²ことと示されている。

つまり、きまりは教師が言葉で伝えるより、子どもたちが友達と関わる中で少しずつ身につくものであり、教師は、子ども同士がより良く関わり合えるような活動や、必要に応じて子どもたちの間に入り、働きかけることが求められているのである。特に幼児期は、「遊び」³の中から様々なことを学ぶ。すなわち、幼児にとって

「遊び」とは「学習」そのものなのである。人間形成の基礎を培う幼児期に「遊び」を中心とした生活を通して心身の発達を促すことが幼稚園教育⁴のねらいである。

2. 幼児期における規範意識の芽生えについて

幼児自身が、生活集団において規範を意識し、言語的に示すようになるのは、3歳頃とされ⁵、4歳児においては、普遍的な規範なのか、集団特有なのかという道德領域・慣習領域の区別が発達することが示されている⁶。そして5歳児では、規範を自分たちで作り出し、用いるようになることが指摘されている⁷。

わが国においては平成20年度改訂の幼稚園教育要領の領域「人間関係」において「規範意識の芽生え」が加わり、幼児期における規範意識に関する研究は増加してきている。しかしながら、「規範意識の芽生え」とは何か、そのための教師の指導・支援はいかなるものなのか十分な議論はされてきていないと言える。

上杉氏によれば、「規範」とは、「基準」、「慣習」、「習慣」、「道德」、「行動様式」、「法」、「ルール」、「きまり」等、多様な意味を含む概念であり、「慣習」や「習慣」のように無意識のうちに行動を規定するものと、「法」や「ルール」のように、明文化されて強く言動を規定する事柄が含まれている⁸と述べている。

つまり、「規範」とは、ある集団に属する人々によって支持されることが求められるもので、明確に示されるものから、暗示的に示されるものまで多様であることが分かる。例えば、幼稚園においては、「ルールやきまり(～すべきである・～すべきでない)」といった明示的なものから、「あいさつをしましょう・友達と仲良くしましょう」といった暗示的なものまでであるといったことが考えられる。一般的に子どもの日常生活における「規範」は、「ルール」や「き



まり」、「約束」といった表現で示されることが多い。

例えば、「遊びの中で、スポーツ、ゲームや遊びのルールの問題を通して・・・」⁹や、「みんなと一緒に生活していくためには、守らなくてはならないいくつかのきまりや約束がある。」¹⁰と表現されていることである。また遊びにおける規範は、「鬼ごっこのきまり」というより、「鬼ごっこのルール」とも示している。

つまり、日常生活には「きまり」や「約束」が、遊びの場面には「ルール」が多く使用されている。「きまり」と「約束」については、「きまり」のみの場合や、「きまりや約束」と合わせて表記されている場合もあり、明確な区別はなされていない。

また幼稚園教育要領（平成 30 年改訂）に示している、「道徳性・規範意識の芽生え」についてでは、「道徳性」と「規範意識」の双方が関連したものであること、特に幼児期においては、その双方の概念は明確に区別されておらず、併せて考えるもの¹¹と述べられている。

一方で神長氏によれば、「道徳性の芽生え」を構成する要素に、「きまりを守る態度」や、

「ルールの必要性の理解」といった規範的内容を挙げている¹²。このように、道徳性と規範意識が併存するという見解と、道徳性の中に規範意識が含まれるものとする見解もあり、研究者の視点によって定義が異なっているのが現状である。しかし、いずれも、「道徳性の芽生え」と、「規範意識の芽生え」は、併存的な関係であることとして捉えられていることは明らかであると考ええる。

東京都教育委員会では、規範意識の芽生えに関しての発達の道筋と、発達に応じた大人の関わりで大切にしたいことを明らかにしている。（表 1 を参照）

本稿においては、これらのことを考慮し、きまりの意味を体験的に学び取ることを意図として、アプローチ期の 5 歳児が主体となるかたる遊びを取り入れた指導を構想し、近隣の幼稚園にて実践した実践報告を行う。

3. 指導案について

本指導案は、アプローチ期の幼稚園 5 歳児を対象とし、幼稚園教育要領第 2 章第 2 節の 2、

【表 1】 規範意識の芽生えに関する発達の道筋、及び大人の関わり（5 歳児）

みんなと一緒に生活することの楽しみを基に、自立に向けて応援を
【規範意識の芽生えに関する発達の道筋】 <ul style="list-style-type: none"> ・ 同年齢の子どもと一緒に遊びを発展させる中で、自分たちで遊び方やきまりを作り出し、守って遊ぶ。 ・ 安全のために必要なきまりが分かり、遊びや生活の中で、危険なことを自分で判断する。
【大人の関わり】 <ul style="list-style-type: none"> ・ 遊びや友達関係がうまくいかない場面では、子どもが、様々な出来事や感情に向き合いながら乗り越えていけるように、一緒に考え支えていく。 ・ 自分で考えて判断し、発言したり行動したりする姿を認めていく。 ・ 日常の生活の中で、交通安全や地域社会のルールについて考える。

（東京都教育委員会『きまりをまもるこころを育てるー幼児期の「規範意識の芽生え」の醸成 指導資料ー』平成 26 年より筆者引用抜粋）



人との関わりに関する領域「人間関係」に基づいた内容として位置付け、開発した。

実践するに当たり、5歳児主体で行うため幼児たちに、自分たち自身で役割を決めさせたり、トラブルになった時に教師は、幼児たち自身で考えさせるような言葉かけを行う。そして、遊びを通して体験的にルールの大切さに気づき、ルールに従うことで皆と楽しく遊ぶことが出来るといった、規範意識の素地を培う一助となることをねらいとした。

5歳児は、「他律から自律へ」、「身近な集団から広く社会へ」と変化しながら、社会的ルールが身についてくる時期¹²であり、同じ目的を持った仲間と集団で行動することが多くなり、遊びをより楽しむために自分たちでルール

を作ったり、守ることの必要性を理解していく時期である。また、他の人の役に立つことを嬉しく思う等、集団の中の一人としての自覚も生まれてくる時期でもある。人の役に立つことや、人に喜んでもらうことで、意欲が高まり、自分たちが出来ることは話し合っ決めて出来る年齢である。

以上のことから、実践にあたっては、友だちと活動する中で、自らの思いを表現したり、時に考えをぶつけ合い互いの思いを主張し、調整しながら、ルールを5歳児たちがどのように自分たちの中に取り込んでいくか、内なる規範となっていくのか、5歳児たちの持てる能力や意欲を活かし、どのように指導に取り込んでいくかを重要視した。

保育指導案

- 1 日 時：2020年1月31日(金)
- 2 対象場所・対象児：広島市内幼稚園 5歳児 男児15名 女児15名 計30名
- 3 活動名：かるた遊び
- 4 5歳児の実態

小学校就学を控え基本的な生活習慣がほぼ確立し、自分のことは自分で出来る子どもが増えてくると共に、生活や遊びのルールを理解し、守ろうとする意識も育っている。また、友だちと一緒に目的のある遊びをしたりグループで課題をやり遂げたりすることに意欲が見られ、そのために必要な「順番を守る」、「時間を守る」、「園内での生活のきまりを守る」等も確立しつつある様子が伺える。

反面、遊びのルールについては、「勝ちたい」、「獲得したい」、「一番になりたい」等の気持ちが強い5歳児は、分かっているが我慢が出来ずルールが守れないために、トラブルの発生につながることもある。また自分の気持ちを通そうとするあまりに、周囲の友だちの気持ちになかなか気付くことができにくいという実態も見られる。

5 活動設定の理由

5歳児のこの時期は、文字や数に興味・関心が高まり自分の名前を読んだり書いたりすることが出来るようになり、環境を整えることで絵本を自分で読もうとしたり、数字と物との対応を理解したりすることが出来る。その中で「かるた」は、文字を覚え始めた5歳児にとって興味を持ちやすい遊びであり、時期的にも正月遊びとして家庭や園で多く行う遊びである。

また、複数名で遊ぶのでルールを守ることが必然的に生じることから、5歳児が面白さを味



わうことが出来ると共に、ルールについて考えたり、友だちの気持ちに気付いたり出来る活動であるとする。

6 ねらいと内容

【ねらい】

- ・かるた遊びを通して、ルールの必要性に気付き互いの気持ちを知って楽しく遊ぶ。

【内容】

- ・友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わう。
- ・遊びの中でルールの大切さに気付き守ろうとする。
- ・自分の思ったことを伝えたり、相手の思っていることに気付いたりする。

7 評価の観点と教師の手立て

【評価の観点】

- ・トラブルを解決する中でルールの必要性やそれを守ることの大切さに気付いていたか。
- ・自分の思いを伝えることや相手の思いを理解することが出来ていたか。

【教師の手立て】

- ・5歳児の主体性を大切にしながら、なぜトラブルになったのかを5歳児同士で考えるように促し見守る。
- ・言葉でのやりとりだけでなく絵カードを示すことで相手の気持ちがより理解できるようにする。

8 本時の活動

時間 (分)	5歳児の主な活動	指導上の留意点と発問	環境構成と準備物
15	1. かるた遊びを始める。 ・4～5人のグループで集まる。 ・自分たちで読み手を決める。 ・かるたで遊ぶ。	・各自の思いが出しやすいように本時は予め決まっている生活グループでかるたをすることを伝える。 ・読み手の決め方は、各グループに任せるようにするが、なかなか決まらない場合は、教師が仲介しながらできるだけ幼児の話合いを尊重して決める。 ・トラブルが起きた場合は見守り、子どもたち同士で解決できるようにする。	・1グループに1組のかるたを用意する。 ・グループごとにござシートを広げて丸くなって座る。
グループごとにかるた遊びを進める。			
10	2. かるた遊びについてみんなで振り返りをする。 ・楽しかったことや面白かったことを発表する。	・勝敗や順位だけでなく、遊びの中で味わった色々な気持ちについて言葉で表現できるようにしていく。 ・「にこにこウサギ」カードを示しながら、友だちの気持ちに気付かせていく。	・「にこにこウサギ」カード



	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの思いを知ったり共感したりする。 ・困ったことや嫌な気持ちだったことを発表させる。 <p>例「お手付きをした。」 「同じ幼児ばかりが札をとった。」 「身を乗り出していた。」 等</p> <p>5 3. 解決策を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場面ごとにルールを決める。 <p>10 4. まとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちのかるた遊びのルールを決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・困ったり嫌な気持ちだったりした時の気持ちを2枚のカードを示しながら受けとめていくことで聞いている5歳児にも友だちの気持ちが伝わるようにする。 ・特定の5歳児の気持ちだけを聞くのではなく、必ず相手や周囲の幼児の気持ちも聞いて全員で共有する。 ・お互いの気持ちを理解した上で、どのようにしたら良いかを考えるように促す。 ・相手を思いやる言動ができる5歳児をしっかりと認め他の幼児にも気付けさせていく。 ・ルールを決め守ることで、みんなが「にこにこウサギ」になっていくことに気付かせていく。 ・トラブルになっている場面では、ウサギカードを見せながら今互いの心の中はどうなっているのかに気付けさせ、ルールを再確認するように促す。 ・自分たちの考えを出してルールを決め遊ぶことができたことを認め評価する。 ・ルールを守ることの気持ち良さを味わわせる。 <p>① かるたを読んでいる人のカードを見ない。</p> <p>② 同時にカードを取った場合は、かるたに手がついている部分の大きい人が勝ち。下になった人が勝ち。</p> <p>③ どちらが取っているかわからない時、他の人もわからない時は、じゃんけんをして決める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「しくしくウサギ」「ふんぷんウサギ」カード
--	--	--	--

(合原作成)



4. かるた遊びの実践について

まず、5歳児のクラス30名を1グループ4~5人に分け、子どもたちで読み手を決めてもらった。読み手の決め方は各グループに任せるが、なかなか決まらない場合は、教師が仲介しながら出来るだけ子どもたちの話し合いを尊重しながら決めた。また、かるた遊びを進める中で生じたトラブルも子どもたち同士で解決させるようにした。

振り返りの際、個人の勝敗や順位だけでなく、子どもたちが遊びの中で味わった色々な気持ちについて言葉で表現出来るようにしておいた。

困ったり嫌な気持ちだったりした時の気持ち、例えば「お手付きをした」、「同じ人ばかりが札をとった」、「身を乗り出していた」を2枚のカード(「しくしくウサギ」「ぶんぶんウサギ」)で示しながら他の子どもたちに伝えるようにする。同時に周囲の子どもたちの気持ちも聞いて全員で共有する。(以下は、かるた遊びが終わり、振り返りの時の教師と子どものやりとりを抜粋して記している)

教師は、黒板に「ぶんぶんウサギ」の絵を示し、
教師:「今日、かるた遊びをしましたね。楽しかったですか?かるたをしていて、ぶんぶんした人はいない?」

子どもたち:「いないよ~」

教師:「じゃあ、顔には出ないけど、心の中で、ちょっとどうしてこんなことになるんだろうって思った人はいない?」

一人の子ども:「けんかがあった。A君が先に手をついて、あとからB君がA君の手の上についたのに、B君が、おれが先だよと言ってけんかになった」

教師:「けんかになって、どうなったん?」

子ども:「A君と、B君がじゃんけんをした」

教師:「じゃんけんをした!? それでどうなっ

たん?」

子ども:「B君が勝った」

教師:「B君が勝ったんだ。じゃあかるたはB君のものになったの?」

子ども:「いや、へりで見えてたCちゃんが、『かるたは先に手をついたA君のものだよ』って言って、結局かるたはA君のものになった」

教師:「そうなんだ。Aくん、良かったね、Cちゃんがいてくれて。でも、もしCちゃんがなくて、そのようなことが起きたらどうする?」

子どもたち:「自分たちで解決する」

教師:「どうやって自分たちで解決する?こういう事よくあるよね。難しいよ。見ていない人がいたらどうしよう?手が重なっていたら、どっちが先か分かるけれど、手が重なってなかったらどうしよう?」

子ども:「同時に手をついたら、かるたに手がついている部分が大きい人が勝ち」

教師は子どもたちに分かりやすいように、かるたの入っていた箱蓋を使って、「かるたに同時に手がついた場合、このように掌がかかるたに多くふれている人が勝ちということになるということね。じゃあ、先にかるたに手がついたのに、後からついた人の方が多くふれていたら、どうしよう?」

子ども:「それは、かるたに少ししかふれていなくても、先にふれた人が勝ち」

教師:「それでは、自分たちのルールをおさらいしましょう。まずは、かるたを読んでいる人のカードを見てはいけません。またかるたは、同時に手をついたら、かるたに手がついている部分が大きい人が勝つということになるよね。またかるたに少しだけれども先にふれた人が勝ちになるよね。他にルールはないですか?これは守った方がいいというものはないですか?」

子ども:「どっちが先か分からない時は、じゃ



んけんにする。もし周りで見ている人がいたら、教えてあげる」

教師：「そうだね。周りで見ている人がいて、『〇〇ちゃんの方が早かったよ』と言ってあげたらいいよね。見てなくて、本当にどちらが先か分からない時は、じゃんけんでも良いよね。じゃあ、今言った3つの約束おさらいするよ、1つ目はなんだったっけ？」

子どもたち：「かるたを読んでいる人のカードを見ない」

教師：「はい。じゃあ、2つ目は？」

子どもたち：「同時に取った時には下になった人が勝ち。少しでも先にふれた人が勝ち」

教師：「じゃあ3つ目は？」

子どもたち：「どっちが先なのか分からない時、見ている人もいない時にはじゃんけんにする」

教師：「はい。じゃあ、この3つを、かるたを取るときのルールにしていいですか？」

子ども：「はい」

教師：「じゃあ、この3つのルールを守って、ぷんぷんやしくしくする人が少なくなって、全員の顔や気持ちが、にこにこになったらいいなと思います。では、これで終わります」

本実践において、教師は子どもたちが互いの気持ちを理解した上でどのようにしたら良いか解決策を考えさせるように促し、場面ごとにルールを決めさせている。その際、相手を思いやる言動が出来る幼児を教師はしっかり認め、他の幼児にも気付かせていた。

また、このかるた遊びをすることで重要なことは、ルールを守ることが目的になってしまうことである。遊びは幼児たちにとって最も基本的な活動であり、幼児の様々な側面の発達を助長するものである。幼児は遊びの中で人生において必要な様々な能力の練習をし、遊びの中で培われた能力を日常生活の中で実践してい

る。また、実践されることによってより頑強になった能力は、再び遊びの中へ戻り、より発展した遊びを幼児にさせることになる¹⁴からである。

教師の介入の仕方であるが、方法は二つある。第一に教師は、教師自身の考えを押しつけずに幼児の自発的な活動に沿って考慮することである。例えば、幼児自身、自分が行った行為が、良かったのか悪かったのか考えるように促し、自ら気づかせるように援助することである。

第二に教師は、幼児の思考力では思いつかないことを示していくことである。例えば、教師が他の幼児の意見や思いに気付かせるような働きかけをしたり、幼児の視点とは異なった視点、特に他者の視点から考えるように促すことである。このような介入は、幼児の自発的な興味を喚起し、物事の特徴に基づいた活動を促すことになる。幼児同士がいざこざを起こしている中で教師が幼児の気持ちを代弁するなどの支援をすることによって、幼児も遊びの中できまりの必要性に気づいていく。このように幼児の規範意識は教師の多様な働きかけを通して育まれていくものと考えられる。

また、幼児同志の相互関係の中でも、遊びの中で互いに自分の考えを出し合ううちに、様々な考え方があるということを知り、それを理解した上でその考え方を受け入れたり、自分とは異なる考えでも尊重したりしながら、さらに意見を確立するという規範意識の芽生えがなされることを可能にすることが出来るのである。

ただし、5歳児の発達から考えると、まだまだ教師の判断が必要な時期であり、全てを尊重することは適切ではなく、子どもと共に考えることは尊重するが、規範ということについては、教師が示す場面は必要になってくると思われる。そして、幼児が明らかに本人の意見とは異なることに同意していると教師が感じた時は、



「〇〇さんはどうしてそうだと思いますか？」や、「自分の想っていることをそのまま言って良いですよ」、「先生は〇〇さんが本当に思っていることを聞きたいです」等の言葉をかけ、幼児自身が正しいと思うことはしっかり発言出来るように寄り添っていくことが大切である。更に幼児が自分の思いや考えを言えた時には、「自分の考えが言えるって素敵だね」等としっかりと褒めたり、認めたりして自信を持たせることである。

5. 本実践の意義と課題

本実践の意義については、5歳児段階でのきまりに関する集団における幼児同士の相互作用、教師の支援から、集団レベルでなく、個々の幼児の意識までも考慮した指導を実践することによる規範の意識付けである。

本実践ではカードを取り入れることにより、幼児たちの意思表示が視覚化され、相手方に理解しやすいように、また明確に意思を伝えることの出来るように工夫した。普段の幼児の遊びの中で、つい見過ごされてしまいそうな思いや、言葉でやり過ごすといったことのないよう、また自分の意思をはっきりと伝えることが困難な幼児もこのカードを使用することによって、今の自分自身の思いを相手に伝えることが出来たのである。

また、教師による指導に関しては、一方的に教え込むのではなく、出来るだけ幼児たちに考えさせるように支援を行い、ルールを守りながら遊びを進めていくことで、どうしたらみんなが楽しく遊べるのかを考える手助けを行うことであった。

幼児たちは遊びの中で、互いに自分の考えを出し合ううちに、様々な考え方があるということを知り、それを理解した上でその考え方を受け入れたり、自分とは異なる考えでも尊重したりしながら、さらにルールを確立するという規

範意識の芽生えがなされることを可能にすることが出来るのである。

この過程を通して、遊びのルールやトラブルの解決に対して共同して取り組むことの出来る力を育むことが可能になり、5歳段階(アプローチ期)における規範意識の醸成といった点における役割は果たせるのではないかと考える。

今後の課題については、小学校教育への円滑な流れをしっかりと構成することが挙げられる。規範意識は、心の教育である「道徳」や、普段の「生活習慣」等の複数の要素が含まれていることから、各教科でも総合的に育んでいく必要がある。今後は小学校段階への連携を視野に入れながら、開発、実践を計画していく。

【参考文献】

- ・秋田喜代美・第一日野グループ著『保幼小連携 育ちあうコミュニティづくりの挑戦』ぎょうせい、2013年。
- ・大方美香『10の姿で伝える要録ハンドブック』学研教育みらい、2018年。
- ・汐見稔幸・中山昌樹『これからの保育シリーズ7 10の姿で保育の質を高める本』風鳴社、2019年。
- ・辻谷真知子「3～5歳の言語的やりとりから捉える規範意識—根拠を明示しない規範に着目して—」日本保育学会『保育学研究』第56巻2号、pp.63-74。
- ・中澤 潤監修 中道圭人・榎本淳子編『幼児・児童の発達心理学』ナカニシヤ出版、2011年。
- ・無藤 隆著『保育の学校 第2巻(5領域編)』フレーベル館、2011年。
- ・東京都教育委員会『きまりをまもるこころを育てる—幼児期の「規範意識の芽生え」の醸成 指導資料—』2014年。
- ・東京都教育委員会『子供たちの規範意識を育



むために』2015年。

- ・厚生労働省編『保育所保育指針解説』フレーベル館、2018年。
- ・文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2018年。
- ・内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館、2018年。
- ・保育総合研究会監修『平成30年度施行新要領・指針ポートブック』世界文化社、2018年。
- ・R・デフリーズ／L・コールバーグ著 加藤泰彦監訳『ピアジェ理論と幼児教育の実践 モンテッソーリ、自由保育との比較研究上巻』北大路書房、1992年。

【引用文献】

- 1 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2018年、p.190。
- 2 同上、p.60。
- 3 遊びの定義には様々あるが、その特徴には幾つか共通するものがある。遊びは幼児自身の内的な動機づけ(やる気)から発生した、遊ぶという目的のために自発的に行われる楽しい活動である。
- 4 アメリカの伝統的な幼児教育は、child development(児童発達)、ないし、child-centered education(子ども中心の教育)と呼ばれ、教育の目標としての「発達」、中でも、情緒と社会性の発達を重視している。また教育の方法としては、教師と子どもとの信頼関係に基づいた「子ども中心」のアプローチに特徴がある。そこでは子ども中心の自由あそびや感情が重視され、教科的内容や知的教育は忌避される傾向がある。日本ではその定義がまだ曖昧であるが、いわゆる「自由保育」に相当するものであると言われている。
- 5 Vaish, A. & Tomasello, M. (2015). The Early Ontogeny of Human Cooperation and Morality. In M. Killen & J. Smetana (Eds.), *Handbook of Moral Development* (2nd ed.). New York & London: Psychology Press. 279-298.
- 6 Smetana, J.G., Rote, W.M., Jambon, M., Tasopoulos-Chan, M., Villalobos, M. & Comer, J. (2012). Developmental Changes and Individual differences in Young Children's Moral Judgments. *Child Development*, 83, 683-696.
- 7 Goeckeritz, S., Schmidt, M. F.H. & Tomasello, M. (2014) Young children's creation and transmission of social norms. *Cognitive Development*, 30, 81-95.
- 8 小川博久・岩田遵子著『子どもの「居場所」を求めて 子ども集団の連帯性と規範形成』ななみ書房、2009年、p.164。
- 9 文部科学省『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』2001年、p.43。
- 10 同上、p.66。
- 11 無藤 隆著『保育の学校 第2巻(5領域編)』フレーベル館、2011年。
- 12 神長美津子「誰にでもわかる道徳性の芽生えの育成」『心を育てる幼児教育—道徳性の芽生えの育成—』東洋館出版社、2004年。
- 13 大場幸夫監修『保育所保育指針ハンドブック』学研、2008年。
- 14 中澤 潤監修 中道圭人・榎本淳子編『幼児・児童の発達心理学』ナカニシヤ出版、2011年、p.102。



**Practical report on the development
of normative consciousness in the approach period**

Toshie Nikaido

Akiko Gohara

National Institute for Educational Policy Research classifies the curriculum in the transition period into the approach curriculum (from September to March in five-year-old children) and the start curriculum (from entering elementary school to the end of the first term of the first grade). Young children in the approach period lack self-control and have difficulty in adjusting their feelings, although they can assert themselves.

They accumulate experience in making compromises with their friends, considering what to do, and conducting activities by changing their emotions. In this period, it is essential to develop a setting where children can learn to keep rules through play, including following orders, making mutual concessions, and taking turns. Teachers must encourage children to solve the problem by themselves, sometimes with teachers' mediation, if problems occur due to breaking the rules, which gives children an opportunity to think about what to do by themselves. We conducted a *karuta* (card) game designed for the developmental stages of five-year-old children at a kindergarten. Children decided the rules by themselves, and teachers supported children in solving problems to implement the child-centered practice. At reflection time, children talked about the difficulties or unpleasant feelings they had felt during play.

Then, the teachers considered these issues with the children, and children could decide the rules such as "Not looking at the reader's hand during the card game," among others. Children might experience conflicts through the *karuta* game and realize the need for rules through the teachers' support. Moreover, they tried to adjust their feelings by themselves, which developed normative consciousness. The *karuta* game contributed to fostering normative consciousness in five-year-old children. In the future, we intend to implement teaching plans by considering the children's link to the elementary school stage.

Keywords: Child Education, Model Consciousness, The Human Relations, Approach Period